コパイバ マリマリの輪

創立20周年に寄せて「冒険者のこころ」

2001年に産声をあげた株式会社サポートジャングルクラブは、御蔭様で本年をもって創業20年を迎えます。大きな節目にあたる今号では、本誌運営元でありコパイバ マリマリを日本で初めて輸入した株式会社サポートジャングルクラブの創設者（現会長）吉野 安基良 氏にお話しを伺いました。

コパイバ通信ご愛読の皆さま、こんにちは。日頃のご愛顧に深い感謝を申し上げます。

さて、地球の裏側 アマゾンの森からコパイバ マリマリをお届けし続けて20年が経過しました。時の流れとはなんと早いものでしょう。こうして皆さまと節目を迎えることが出来たことが、大変嬉しいです。私がまだ農事組合法人を率いて、無農薬の野菜をご家庭にお届けしていた80年代の頃からお付き合いを頂いている方もいらっしゃるかと思います。お元気でお過ごしでしょうか。もう、私も今年で71歳。世間ではすっかり「おじいさん」と呼ばれるような年かもしれませんが、若かりし頃に胸に抱いたユートピアに向かって、冒険心を忘れず走り続けています。

振り返ってみれば、1992年リオ デ ジャネイロで開催された国連環境会議で採択されたプロジェクトに基づき、アマゾン先住民の方々とのフェアトレードはスタートしました。

当初このプロジェクトは、アマゾン採取者協同組合通称〝COPEAMA〟によって構築された枠組みの中で、同組合との提携によって運営されていました。アマゾンの森を憂う地元の有志たちによって構成されたこの組合に、他国から来た様々な団体が賛同し、組合が定めた枠組みの中でそれぞれがフェアトレードを行います。が、ある時プロジェクトの運営陣内で問題が発生し、突如として組合が解散してしまい、フェアトレードの枠組みも立ち消えてしまったのです。そこで私個人がプロジェクトの意思を引き継ぐつもりで、日本向けの流通・販売体制を整えたことが、今日の活動の発端と言えます。そこからおよそ7年の歳月を経て、しっかりと製造・販売・管理を行う組織として株式会社サポートジャングルクラブを立ち上げました。

私がコパイバ マリマリと出会ったのは、先に述べたプロジェクトの具体化の前に現地の環境調査で初めてアマゾンの森へ入った頃です。初めてアマゾンの過酷さを体感した時でもあります。生態系に負荷を掛けずに商業利用できる資源がどのくらいあるのかを調査するため、あちこちの森に分け入るのですが、その度にムクイン（※ダニの一種）や藪蚊に噛まれて、それはもう酷い有様になりました。足が腫れ化膿した傷口は熱を持ち、痒みと痛みに耐えられない日が幾日も続きました。すると弱った私を見た友人が村のシャーマンを連れてきてくれました。「これを塗りなさい」とその時手渡されたものが そう、コパイバ マリマリです。そこから先は、皆さまもご体験いただいている通りです。私の中の生命力がコパイバと共鳴するかのように、爛れた皮膚をみるみる修復してゆきました。